

関東部会 市民公開講座

「新興感染症から私たちの生活をいかに守るか」を開催して

第120回日本薬理学会関東部会 部会長 萩原正敏

2009年7月11日に東京医科歯科大学にて開かれました第120回日本薬理学会関東部会では、新しい創薬手法の開発につながると目される「ケミカルバイオロジー」という研究領域を中心テーマに据え、次世代を担う皆様方にインパクトのあるメッセージを伝えるべく企画しました。さらにこの研究領域と私たちの生活のかかわり合いを、より多くの皆様に知っていただくための切り口として新興感染症を取り上げ、「新興感染症から私たちの生活をいかに守るか」を主題とする市民公開講座を開催し、ケミカルバイオロジー的手法を用いて最先端の創薬開発を進める満屋裕明先生（熊本大学・医学部）、桑田一夫先生（岐阜大学・人獣感染防御研究センター）にお話しいただきました。

多くの感染症が古来よりヒトの生存に対する脅威として存在しています。20世紀以降の感染症に対する研究・診断・治療・予防法の飛躍的な発達、および公衆衛生に関する社会一般の意識の向上により、一時は「人類は感染症を制圧できる」とも信じられてきました。しかしながら、活動のグローバル化による新興感染症の台頭、また変異により既存薬剤耐性を獲得し、再び人類生存の脅威となった再興感染症の問題から、人類は感染症病原体の生命としてのしたたかさに驚嘆させられると共に、新たな対応手段を開発する必要に迫られています。今春メキシコに端を発し、今も引き続き豚インフルエンザの流行はその一端を示すものでしょう。

満屋先生には、新興感染症の一つであり、日本では

未だ患者数が増加傾向にあるヒト後天性免疫不全症候群（AIDS）について、その創薬の歴史とこれからのアプローチをお話しいただきました。AIDSの原因ウイルスであるヒト免疫不全ウイルス（HIV）の生活環を中心に据え、ウイルス増殖の各ステップにおけるキータンパクに対する「分子標的アプローチ」の解説はとて判り易いものでした。「分子標的アプローチ」は極めて変異率が高く、従って単剤では耐性ウイルスの出現が問題であったAIDS治療の現場に、多剤併用療法（HAART）と言う手法をもたらし、この手法がAIDSを「死の病」から「治療可能な慢性感染症」へと変化させた功績は論をまちません。

また岐阜大学・人獣感染症センターの桑田一夫先生には、人獣感染症として、また新たな感染症病原体の定義を提唱することとなった、プリオン病に対するシステムティックな創薬手法についてお話しいただきました。岐阜大学におけるタンパク構造解析、化合物構造展開と薬効評価を連動させて効率の良いドラッグデザインを行う試みには、これからのますますの発展が期待されます。

しかし感染症対策に最も効果的なのは、なによりも「感染しないこと」です。「新規の感染者を出さない」という予防と啓発こそが、私達の社会にこれまでもまして肝要である」という満屋先生のしめくくりの言葉が、万難を排し市民公開講座にご参加くださった方々へのTake-home messageとなったことを祈念してやみません。（奥野友紀子 Yukiko Okuno）

第120回日本薬理学会関東部会 市民公開講座

**新興感染症から
私達の生活をいかに守るか**

 日時：2009年7月11日（土）16:40 - 18:20
 場所：東京医科歯科大学 5号館講堂
 参加費：無料（そのまま来場ください）

満屋裕明（熊本大学・大学院医学薬学研究所）

 性感染症としてのHIV感染症と
AIDS とどのように戦うか

桑田一夫（岐阜大学・人獣感染防御研究センター）

 プリオンの立体構造を制御する
低分子化合物の開発


左) 市民公開講座ポスター

中央上) 満屋裕明先生

中央下) 桑田一夫先生

右) 講演風景